発問例

●一九六ページ

問 **小説の前提となる時・場所・主人公の状況についてまとめてみよう。**

答 時＝稲の穫り入れの始まる頃（秋）。
場所＝城崎温泉。散歩するのにいい場所がある。
状況＝けがの後養生のために城崎に来た。一人である。
頭がはっきりしない。
物忘れが激しくなった。

問 **主人公の日常はどのようであったか。**

答 話し相手がいない。
読むか書くか。
ぼんやりと風景を見ている。
散歩をする。

●一九七ページ

問 **「やはり」（5行目）は、どのようなことを受けているか。**

答 「冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡」という周囲の風景が持つ寂しい雰囲気。

問 **「寂しい考え」（5行目）とは、どのような考えか。**

答 一つ間違えば、祖父や母の死骸が脇にある墓の中で、青い冷たい顔をして寝ていただろう、という考え。

問 **「しかしそれには静かないい気持ちがある」（6行目）の「しかし」は、どのような働きをしているか、「寂しさ」（寂しい考え）と「静かさ」とを対比して説明しなさい。**

答 「しかし」は「寂しさ」と「静かさ」を対比させる接続詞で、「寂しさ」には親しみ（「いい気持ち」）を感じないが、「静かさ」には親しみを感じていることがわかる。

問 ⊙**「それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった」（15行目）のは、なぜか。**

答 身近な人からの想像でもあり、死は誰にでも到来する静かな境地であり、騒ぎたてるようなことではなかったから。

●一九八ページ

問 **「いつかはそうなる。」（1行目）とはどういうことか。**

答 死んで、墓の下で祖父や母の死骸を脇にしながらお互い何の交渉もなく横たわること。

問 **「いつか知れない」（2行目）とあるが、この「いつか」は「それがいつか?」（1行目）の「いつか」とどう違うか、説明しなさい。**

答 2行目の「いつか」は極めて切実で切迫感が強いのに対し、1行目の「いつか」は遠い漠然とした時期を指し、切実さ、切迫感に欠けている。

問 **「そういうふうに」（5行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 本当は死ぬはずだったが、自分にはしなければならぬ仕事があるから、何かが自分を殺さなかった、ということ。

補 「クライブのように」ということだが、主人公の立場に置きかえて考えてみると、電車の事故で重傷を負って死んでしまったかもしれないのに、自分は辛くも死を逃れて生きている。生きているということに何がしかの意味があるのだということになる。「（クライブが）激励される」（5行目）ように自分も、助かった命に意味を感じたいということになる。

問 ⊙**「感じたかった」（6行目）と過去形で表現されているところに、どのような思いが表れているか。**

答 生き残ったことに自分だけの人生の意義があると考えたが、一方で、そこから微妙に離れている思い。

語句の研究

●一九六ページ

1山の手線　跳ね飛ばされたときの様子などは「参考」欄にも揚げた日記などを参照のこと。「城の崎にて」初出当初の山手線は中野～新宿～東京～品川～池袋～田端～上野と、「の」の字の経路をたどっていた。現在のような環状運転を行えるようになっ

たのは大正十四（一九二五）年の上野～神田間の線路が完成したことによる。一九六ページの一両編成の写真とあわせて、当時の風俗と現在の風俗の違いを紹介する一助になる。

1 城崎温泉　池内輝雄は志賀直哉の友人である長与善郎の父、長与専斎が城崎温泉に縁のある人物であった事を手がかりに、『但馬城崎温泉案内記』という小冊子を参照しながら、「傷の治療はもとより胸部、脊髄などの病の療養に適するという城崎温泉の効能は、その意味で、まさに「後養生」にもってこい」「知人などに会うことのない東京からはるか離れたところで、しばらく静かに過ごすことが企図されたのかもしれない」と考察している（「「城の崎にて」論」『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ、文学研究と国語教育研究の交差　小説編　2』）。湯治が一般的な療治方法の一つとして見なされていた時代の小説であることを生徒に伝えておきたい。

2 脊椎カリエス　かつて「亡国病」とまで恐れられた結核菌が脊椎に回った病気。結核といえば樋口一葉なども命を落とした肺結核を連想しがちだが、リンパ節や骨、腎臓、腸などあらゆる場所での結核菌感染が起こりえる。現在では化学療法の発達により病臥期間が大幅に短縮された病気ではあるが、それでもなお髄膜（脳を包む膜）に結核菌が付着し髄膜炎になるなど、全く縁のなくなった病気というわけではない。

3 二、三年で出なければ後は心配はいらない　「それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」（二〇六・3）と対応する。医者（他者）に言われた命の心配から脱したことに対して、「三年以上」経ってから「だけは助かった」と限定的な語り方をしていることに注目させたい。

3 要心は肝心　注意することが大切。「要心」は「用心」、「肝心」は「肝腎」とも書く。「肝心」は大切、重要の意味に用いる。

4～5 三週間以上……我慢できたら五週間くらいいたいものだ　「三週間いて、自分はここを去った」（二〇六・3）と対応する。この対応関係から、主人公は城崎温泉滞在中に何らかの原因があって我慢しきれなくなったと読み取れる。学習者の興味をひくため、最初にこの対応関係を指摘しておいてから本文の通読を始めることも考えられる。

8 しかし気分は近年になく静まって　志賀直哉の実生活と重ねれば、結婚問題、作家志望、出版費用の依頼などで、作者と父との衝突・不和、尾道での借家生活の不安定が「近年」の生活として考えられる。また、【頭（身体）＝はっきりしない】／【気分＝静まって、落ち着いたい気持ち】の二項対立を指摘することで、後の【寂しい】／【静か】に注目するきっかけを作ることもできる。

11 一人きりで誰も話し相手はない。　「城の崎にて」の草稿「いのち」には城崎温泉での生活が次のように書かれている。「…自分は温泉に来た。自分は精出して入浴した。それから読む事、書く事、散歩する事をした。然し書く事と入浴とは一致しなかつた。入浴を精出せば絶えずからだも気分もゆるんだ。」なお、この時期に書いていたのは「暗夜行路」前編の草稿（→二〇〇・脚注14）である。

●一九七ページ

4～5 小さい清い流れ　「やまめ」が「たくさん集まっている」ことから、この「流れ」の清さは国土交通省や環境省が制定した「水質階級Ⅰ」に相当すると考えられる（→「参考」資料①）。また「足に毛の生えた大きな川がに」は記述された外見および生息域から、モクズガニを指すと思われる。城崎温泉は海に近いゆえに遡上してきたのであろう。いずれにせよ小さな生き物か

ら周囲の自然や雰囲気を想像する一つの手がかりになる表現である。

5やはり沈んだことが多かった。　「やはり」は、前の「冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡」という、周囲の風景の持つ情調（寂しさ）を受けて使われている。「沈んだこと」とは、すぐ後の「寂しい考え」すなわち「けが」「祖父や母の死骸と何の交渉もなく寝ている自分の死骸」についての考えである。

8一つ間違えば　「一つ」は副詞で、ちょっと、ほんのわずかという意味。

16いつかはそうなる。それがいつか？　「いつか」は漠然とした、それほど切迫感のない心情である。次の文の「知らず知らず遠い先のことにしていた。」（一九八・1）という程度の「いつか」である。

●一九八ページ

3自分は死ぬはずだったのを……仕事があるのだ　長嶋和彦は、実際に志賀直哉が中学時代に読んだであろうロード・クライブの伝記を特定した上で、以下のように指摘している。「『城の崎にて』に書かれている「自分は死ぬはずだったのを助かった」というのは、クライブが二度ピストル自殺を図ったけれども、弾丸が確かに装塡されていたにもかかわらず、なぜか二度とも弾丸は発射せず、一命を取り止めたことを言っているのである。」（「クライブ卿興信録―『城の崎にて』の「ロード・クライブ」について」）また、この部分は「そう思うことによって」の「そう」に相当する部分である。

6しかし妙に　クライブのような一種の使命感、奮い立つような人生の意義を感じたかったが、実際はそれと反対に気持ちが静まってしまったという不思議さを「しかし妙に」と表現している。そして、次の文章にあるように「生」よりも「死」に心が傾いてゆくことになる。

キー・ポイント　「寂しさ」と「静かさ」　「寂しい」という言葉が、「寂しい秋の山峡」（一九七・4）（風景）のような周囲の情景に対してと、「寂しい考えだった。」（一九七・5）（自分の死についての考え）のような「死」そのものに関する感情との二つのものに対して用いられている点に留意したい。周囲の風景の持つ情調を受けて用いられている。さらに、「しかしそれには静かないい気持ちがある。」（一九七・6）の「それ」は直前の「寂しい考え」を指している。この「寂しさ」と「静かさ」とが「しかし」ではさまれていることにも注意する。「自分」（主人公）は、「寂しさ」には直接親しみを感じず、「静かさ」に親しみ（いい気持ち）を感じている。つまり、「寂しさ」の中に「静かさ」を感じ、そこに強い関心を示してゆくのである。また、表現上の違いを考える場合は「寂しさ」は主観的表現であり、「静かさ」のほうは客観的表現と考えることができる。「寂しさ」と「静かさ」が異質のものであることを押さえさせたい。

7何かしら死に対する親しみ　けがをきっかけに死を改めて身近に感じるようになったことで起こった「親しみ」だが、ここではまだ漠然とした、そこはかとない感覚で、祖父や母の「死骸」を想像することから生じた実感的な感慨であることが印象づけられる。また、「城の崎にて」は「三年以上」経った時点から城崎温泉滞在を振り返る形式の小説であることを重視すれば、三つの小動物の死を見る前のこの時点では、まだ「死に対する親しみ」を明確に言語化して語れないのだとも読み取れる。

注意する語句

ふち…水を深くたたえた所。（＊で用例を示した）
＊魚はふちに深く沈んでしまった。